



連載

ビブリオ・トーク
—私のオズメー

…中田眞城子 (plusplus (株))

プルーストとイカ

—読書は脳をどのように変えるのか？

メアリアン・ウルフ 著, 小松淳子 訳

インターシフト (発行), 合同出版 (発売) (2008), 384p., 2,400 円 + 税, ISBN : 978-4-7726-9513-8



題名に惹かれて

「プルーストとイカ」。副題の「読書は脳をどのように変えるのか」がなければ一体何のことが書いてある本なのか分からない。その意味では不親切な題名である。だが、この奇妙な取り合わせの題名に惹かれて購入した。いざめくってみるとその軽やかな響きに反し、巻末には謝辞の後に認知科学や脳科学や心理学や言語学やらの 23 ページに及ぶ参考文献が載っている。これは気軽に読めると思っていた私の失敗だったと思い、あっさりと「積ん読本」となっていた。ところが、たまたま知人の子どもがディスレクシアであると分かって、慌てて読み進めることにしたのだ。

この本を手にした本来のきっかけはコンピュータと脳の関係についてのヒントがありそうだったからだが、ディスレクシアについても割と詳しく書いてあることもなんとなく知っていた。

ディスレクシアを説明すると、日本語では「読字障害」と訳されている。字を意味のあるものとして認識できないことを指す。知人の子どもについて言えば、私たち仲間うちの食事会についてくることもしばしばあるのだが、その場での大人との会話のやりとりもきちんとできる。ユニークな発想をするので話は面白く、小学校生活で問題を抱えているとは思ってもみなかった。だから親である知人が授業でテストを受ける際に、先生に読み上げてもらい、口頭で答えるテストにしてくれるよう学校に直談判に行ったというエピソードを聞いて驚いたのである。私の感じていた当人の優秀さとのギャップはなんなのだろうか。初見の外国語の文字でなく、幼い頃か

ら慣れ親しんでいるはずの日本語の文字が意味のあるものとして認識できないというのは一体どういうことなのだろうと不思議に思ったのである。

脳はどのようにして読み方を学んだか

「私たちはけっして、生まれながらにして文字を読めたわけではない。人類が文字を読むことを発明したのは、たかだか数千年前なのである」。冒頭の翻訳文である。世の中に文字は存在しなかったのだから文字を読む機能が脳に備わっていないということは言われてみれば当たり前のことなのだが、改めて納得した次第である。かいつまみすぎて誤解を生じてしまうかもしれないが、文字が出現したことによって脳の構造そのものが組み直され、知能の進化を一変させたとある。本来備わっている視覚と話し言葉を理解する回路に、これまでになかった新しい接続が生み出され、なお広がり続けている。それはまさにコンピュータでいうところのオープンアーキテクチャである。

人類が文字を獲得してから、生まれたての赤ん坊がどのように文字を認識していくのだろうか。たとえば、子どもは大人に話を聞いてもらいながら、そのページに記されている線が文字であることを理解し始める。その文字が並ぶと意味のある単語になり、単語がその物語を構成し、物語は何度でも繰り返し読めるということを通して学んでいく。私自身の子育て中の経験だが、息子がよちよち歩きでようやく話し始めたころ、テレビの天気予報を見ると、出てくる都市の名称「和歌山」を指差しては「電車」と言う。漢字が電車に似ているわけでもない。毎日繰り返

返すので気になってはいたものの意味は分からないままだった。1カ月くらい経って通勤に使っている電車の先頭に行き先として「和歌山」と書いてあることにより気づいた。抱っこで一緒に通勤していた息子はこの表示を見て、文字の意味は理解していないものの図形として記憶していたのだろう。ようやく本当の「読み」を教えることができ、その日から「電車」ではなく「和歌山」と言うようになった。私が子どもの文字を覚える能力を知ったきっかけでもある。

おそらくそれがうまくできないのがディスレクシアであろうと思う。無論、できないのにはさまざまな要因がありその分析もこの本には書かれている。同時になぜそういった違う発達を遂げる人々がある一定数出現するのかということについても解明しようとしている。つまり、ディスレクシアは弱者であるだけの存在なのだろうかと投げかけている。

脳が読み方を学習できない場合

現実にトーマス・エジソン (Thomas Alva Edison), レオナルド・ダビンチ (Leonardo da Vinci), アルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein) などに代表される「ある分野で際立った能力を発揮している人」の中に、少なくない確率でディスレクシアが存在することが確認されているらしい。これは、左脳に生じているほかの人とは違うなんらかの変化がほかの領域、特に右脳の優位につながっているという逆説を成り立たせている。

ディスレクシアとして生まれたことで、すでに何らかの別の能力を備えた脳を持つという可能性が大いにある。このことを知らずに過ごすのと知って過ごすので生き方は随分変わってしまうのではないだろうか。

さて、ようやくコンピュータと脳との話である。人類は、というか人類の脳は、今まさに新しい岐路に立っている。つまり文字を習得しはじめたころのように、コンピュータの出現によって新たな局面を迎えているという。文字のないころ、覚えていることがすべてであったのが、文字の出現により記録することができ、暗記のみに頼る必要がなくなった。拡大する知識をいくらでも手に入れることができるようになり、それらを読むことによって脳はそれまでよりもなお深く思考することに繋がっていった。しかし、カーツワイル朗読機が発明されて以来、コンピュータの進歩により、ディスレクシアのように読みができなくても不利は解消されたといえる。そして、その先には、やりたいこと、してほしいことを自動的にコンピュータが予測してやってくれる生活が広がっている。そうなればこれまでのように知識そのものを文章として蓄えておき、その文章を知識として読み、それについて考える必要もなくなるのかもしれない。そうなったときに人間の脳はどうなっていくのだろうか。新たに、別の回路が繋がるような進化を始めるのであろうか。そのヒントを実はディスレクシアが握っているのかもしれない。

最後に、題名になっている奇妙な取り合わせについては、ここで述べないでおこうと思う。気になる方にはぜひご一読を。

(2017年11月9日受付)

中田真城子 (正会員) info@mplpl.com

エンタテインメント用ウェアラブルデバイスを開発運用する mplusplus (株) の設立メンバであり現 CFO。過去にエディタやアートプロデューサー、産学連携コーディネータなどの経験あり。